最上川流域における古墳の出現と展開

川崎利夫

一、はじめに

古墳は古代前期における顕著なモニュメントであり、国家形成期における地域の動向をさぐる上で、きわめて重要な資料であることはいうまでもない。

古墳は弥生時代後期のヤマタイ国女王卑弥呼の死後、混乱の時期をへて三世紀半ば過ぎ、奈良盆地の南東部三輪山の山麓に最初に出現をみたといわれる。卑弥呼の墓ともいわれる全長二七八メートルの「箸墓古墳」が初期の古墳として知られている。

最上川流域は、七世紀にいたるまでの古墳時代における古墳の北限の地である。おそらく大和連合国家による列島支配の北端の地であったと考えられる。それより以上の北の地域は、これらの政治連合とは異なったエミシの世界であった。本誌前号では弥生時代の水田稲作の伝播と受容を中心に、二、三の古代における最上川が果した役割について取り上げた。その中で古墳時代の様相については、詳しくふれる余裕がなかった。

これまで最上川流域の古墳時代について論考した文献はわりと多く見いだすことができる。最近の古墳とその時代の研究は日進月歩の状態である。先学による研究の業績に依拠しながら、今日の古墳研究の状況をふまえて最上川流域における古墳の出現や展開を、その地域の社会や政治状況と関連づけながら再度考えてみたい。

二、最上川上流域における古墳の出現

最上川上流域の米沢盆地には、南陽市稲荷森古墳（国指定）、川西町天神森古墳（県指定）、米沢市宝領塚古墳の三基の、地域では最大の古墳が分布する（図2）[1]。前者は全長九六メートルの前方後円墳、後二者はともに七五メートルの前方後円墳である。但し宝領塚は前方部が削平され失われてしまった。

稲荷森古墳は県内最大の前方後円墳で、後円径六二メートル、

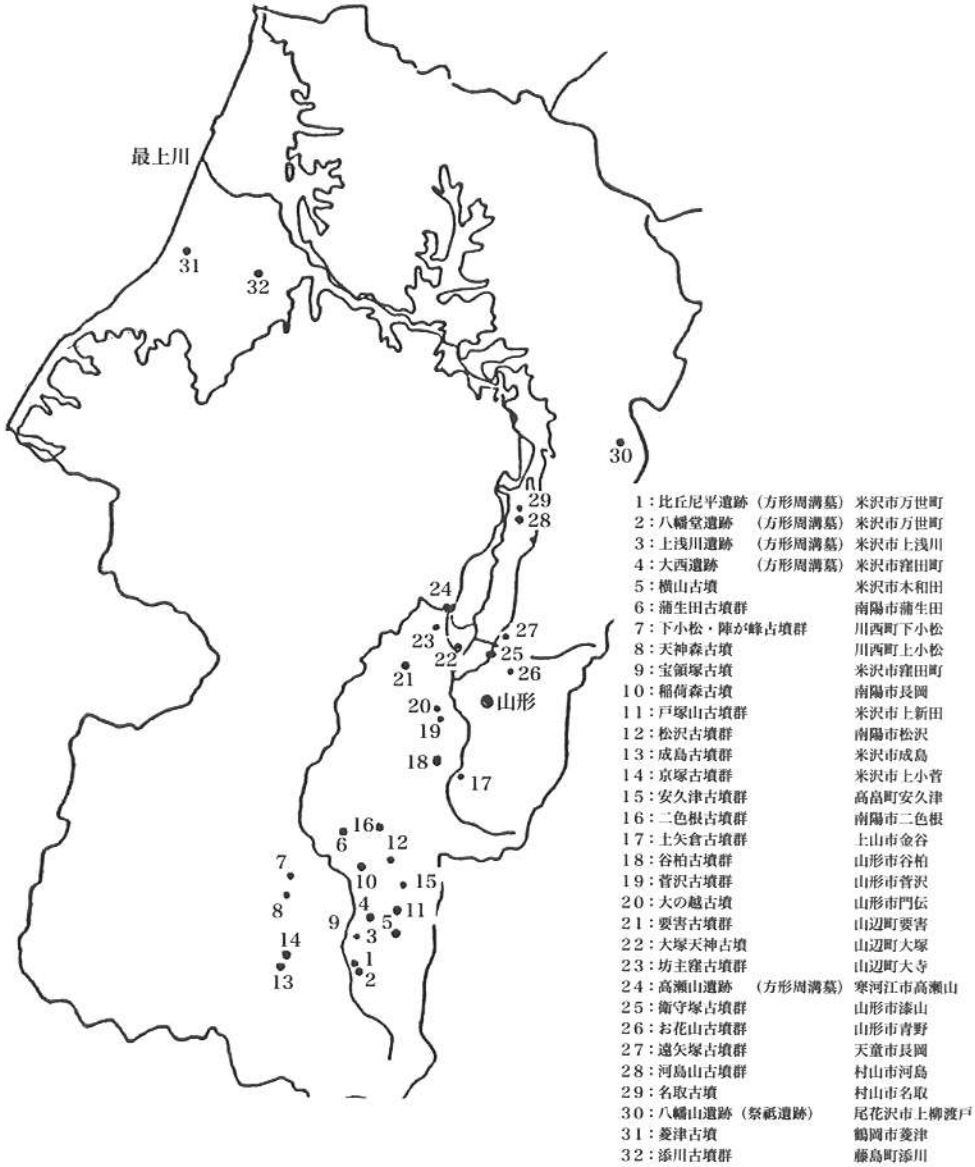

図１　最上川流域の主要古墳分布図

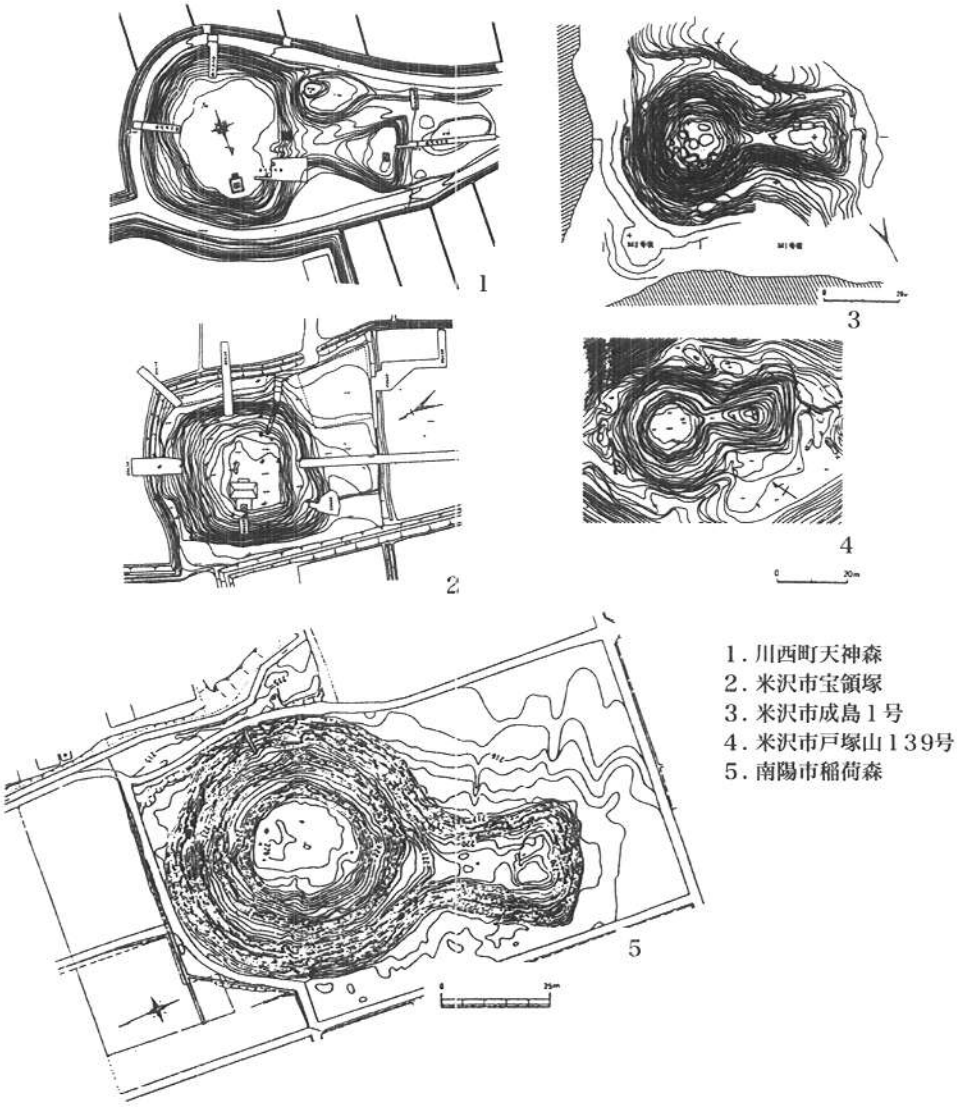

図２　山形県の主要前方後円（方）墳
１．川西町天神森　２．米沢市宝領塚　３．米沢市成島１号　４．米沢市戸塚山139号
５．南陽市稲荷森

前方部長さ三四メートル、前方部高さ一〇メートル、前方部は後円部の約半分の長さで、短小であり、前方部未発達ともいえるであろう。平地から盛土をして築いたものではなく、丘陵の一部を断ち切り、地山を削りとって前方後円形に整形し、一段目の基底部をつくり、その上の後円部二・三段を版築による盛土を行い、前方部二段を同様に盛土している。まわりに濠は認められない。後円部に高さ五メートルの前方部が伸びる銚子形のような平面形である。これまでの墳丘部の調査で、後円部基底部より脚部が拡がり三孔を有する器台破片や後円部直下より刻目が点列する壺の小破片が発見されているが、四世紀後半を溯るものとは思われない。これを奈良県行燈山古墳との類似を指摘するむきもあるが[2]、崇神陵に比定されている行燈山古墳は二四〇メートルの遥かに大きい古墳で、前方部も稲荷森のように短小とはいえず幅も広い。いま北辺の最大の前方後円墳として史跡公園として整備され、その偉容を偲ぶことができる（図2—5）。

最上川をわたって米沢盆地西部の川西町上小松の小松駅北東の平地に天神森古墳（県指定）がある。後方部の墳頂部には布留天満社が祀られてやや広い平地となっている。全長七五・五メートルを測り、後方部長さ四三・〇八メートル、幅五一・〇五メートルで、高さ四・二六メートルである。前方部は低く高さ二・八メートルで、前方部先端幅は三二メートル、前方部の長さにほぼ等しく、先端にむかって撥形に開く、幅六・五メートルの浅い周濠がめぐる。周濠やくびれ部より底部穿孔の複合口縁の土師器壺の破片五個体分や広口壺・円孔を有する高坏などが発見された。中には朱彩されているものもあり、東北の前期土師器として編年されている塩釜式でも古い様相を示す（図2—1）。

前記稲荷森古墳の南八・五キロ、米沢市北部に宝領塚古墳がある。前方部は削平されて残らないが、地籍図によれば前方部があったことがわかり、わずかにその痕跡をうかがうことができる。残存する後方部は、長さ四〇・五メートル、幅四七メートル、高さ五・四メートル、三段築成で二、三段目に部分的に葺石が認められる。全長は後方部の大きさからして、七五メートル前後と推定される（図2—2）。

これら米沢盆地における比較的大型の古墳が、盆地を三分するように、稲荷森古墳が北部に、宝領塚古墳が南部に、そして最上川を越えた西部に天神森古墳が分布することに注意する必要がある。初期の古墳の尺度を一尺—二三センチとすると、二二〜二四センチの範囲に稲荷森は四〇〇尺、宝領塚、天神森は三二〇〜三三〇尺におさまり、統一的な尺度が採用されていることを思わせる[3]。

さらにこの二つの古墳について後方部の長さを六等分した場合、幅六に対して長さ五という横長である。このような横長タ

イプの後方部をもつ前方後方墳は、かつて東北最大の前方後方墳といわれた福島県原町市桜井古墳と大きさも横長の後方部も共通している。会津盆地に分布する会津坂下町鎮守森古墳は全長五五メートルであるが横長タイプである。塩川町十九壇三号墳も規模は小さいが横長の後方部をもつ。このように後方部横長で、前方部が撥型に聞くタイプの古墳を北陸に求めるならば石川県小田中亀塚古墳が類似しており後方部に葺石が認められ、全長六一メートルの前方後方墳である。

宝領塚と天神森の二つの古墳は、あるいは会津や北陸に系譜を求めることができ、尺度においても統一的で共通なものがあったと思われる。稲荷森は墳形は異なるものの、四〇〇尺の完尺を示し、出土遺物からしても四世紀後半で、三者とも時期差は少ない。稲荷森は規模もやや大きく、前方後円という墳形である点が抜きん出てはいるが、ほぼ同じ時期に、場所を隔てて盆地を三分する形で、大型古墳の分布がみられることは、四世紀後半に三つの政治勢力が米沢盆地に鼎立していたことを示すことにほかならない。稲荷森古墳をもって米沢盆地一円の政治的社会を統合した首長層の記念碑とみる見解もあるが、確かに三つの勢力の中で盟主的な地位にあったことは否めない。その後の古墳の展開からみても、米沢盆地一帯を統合するような絶対的な首長ではなく、相対的にやや一歩抜き出た政治集団の首長であったのだろうと考えられる。

吉野川や屋代川流域の農耕共同体を統合した稲荷森古墳の首長といえども、天王川・羽黒川・松川水系を統轄する宝領塚の首長や最上川西部を統轄した天神森の首長を凌駕するようなものではなかった。四世紀後半にこれらの首長共同体が比較的安定した地歩を置賜盆地に築いたことがうかがえる。

しかも三つの古墳が奥まった山地に立地するのではなく、それぞれ可視的な場所に築造されている。置賜という豊かな地域を支配する「支配共同体のメンバーシップの相互視認」[4]という機能ももっていたのである。こうして古墳出現期において、山々によって四周がとざされた置賜地域は、当初から安定した地域社会を形成することができたと思われる。

ところがこれらの大型古墳が四世紀後半に突如出現したのではなかった。その前段階にすでにその前提となる小古墳があったということが最近明らかになった。それらは平地を望む丘陵端部に立地し、墳丘は低く前方後方形や方形を呈して、なかに弥生後期の土器片が近い場所から出土する例もあり、弥生墳丘墓を彷彿させる。明らかに本地域では最古の土師器が出土しているから、古墳時代に入って築造されたものである。

一九九〇年に保養施設の建設に伴い、南陽市の赤湯と宮内の間に位置する蒲生田山の分布調査が行われた。南側にむかって張り出した白鷹丘陵の台地上に三基の古墳があることがわかった。二号墳のみ現存するが、もっとも上方に位置する三号墳は

主軸長二九メートル、前方部が下方にあり、同規模の四号墳はそれより三〇メートル下方にあり、三号墳と互い違いに前方部が上方にあった。墳丘は削平され周濠のみ明瞭に現存していたが、台地の平地部に伸びる鞍部に、上方より三・四・二号墳が並ぶ。発掘された三・四号墳の二基は、やはり後方部横長タイプの前方後方墳であった。内部主体は僅かに残存した基底部から推定して木棺直葬と思われる。三号墳の周濠から出土した二個の土師器壷が復元された。いずれも口縁が大きく外反し、外傾する頸部をへて球形の体部にいたる。底部は焼成前穿孔が認められ朱彩が施される。器高二七・一センチと二一・九センチである。このような類例は、東北にはみられない。東海や中部の古式土師器にみられるものである。

四号墳の周濠から出土した土師器には、外傾する二重口縁の破片や口縁部が外傾し、「く」の字状に屈曲して体部につづく高さ三〇・六センチの壷などがあり、北陸や関東北の土器に類似する。これらの遺物からみても、四世紀中葉を下ることはなく、これより二・五キロ南に位置する稲荷森古墳に先行する前方後方墳であることがわかる。

一九九九年に米沢市教育委員会は、遺跡詳細分布調査において、米沢市街北東四キロの天王川に臨む丘陵尾根の突端部で、一辺一三メートルの方墳を発見し発掘調査が行われた。高さ一・四メートルの低い塚であるが、墳丘中央部から南北に並列する長さ四〜五メートル、幅一メートルの墓壙が発見された。北側の一号墓壙は、同時に埋葬されたと思われる二・三号墓壙より若干新しい。墓壙内より長さ三・三メートル、幅五五センチ程の木棺を据えた跡が検出されたので、箱形木棺直葬による内部主体であることが判明した（図3）。

墓壙やその周辺からは、多数の土師器片と管玉一点が検出された。復元された土師器は、坩一点、器台三点、高坏一点などで、いずれも丁寧なヘラケズリ、ナデ、ミガキが施されている。坩は球形の体部に外傾する口縁が長く伸びる。三孔を有する器台は大きく外方にひろがる。これらの土師器は、会津坂下町宮東・男壇の方形周溝墓などから出土した塩釜式古期の土師器に類似し、四世紀中葉を下るものではない。宝領塚古墳はこれより五・五キロ北西の鬼面川の左岸平地部に位置する（図3）。

最上川より西の川西地区には天神森古墳があるが、その北西部の丘陵部眺山丘陵には南から北へ谷をへだてること三・五キロにわたって、小形前方後円墳二〇基を含む二〇二基の古墳が点々と分布する。これらの古墳群の大方は国指定史跡となった下小松古墳群である。その古墳群の北端に位置する陣が峰支群の三基の内、全長一七・八メートルの前方後方墳とされる一号墳の調査が町教育委員会により二〇〇〇年に実施された。やはり横長タイプの後方部をもち、三基の木棺直葬の痕跡が確かめられた。墳丘やくびれ部より高坏・器台・小形壷・二重口縁壺

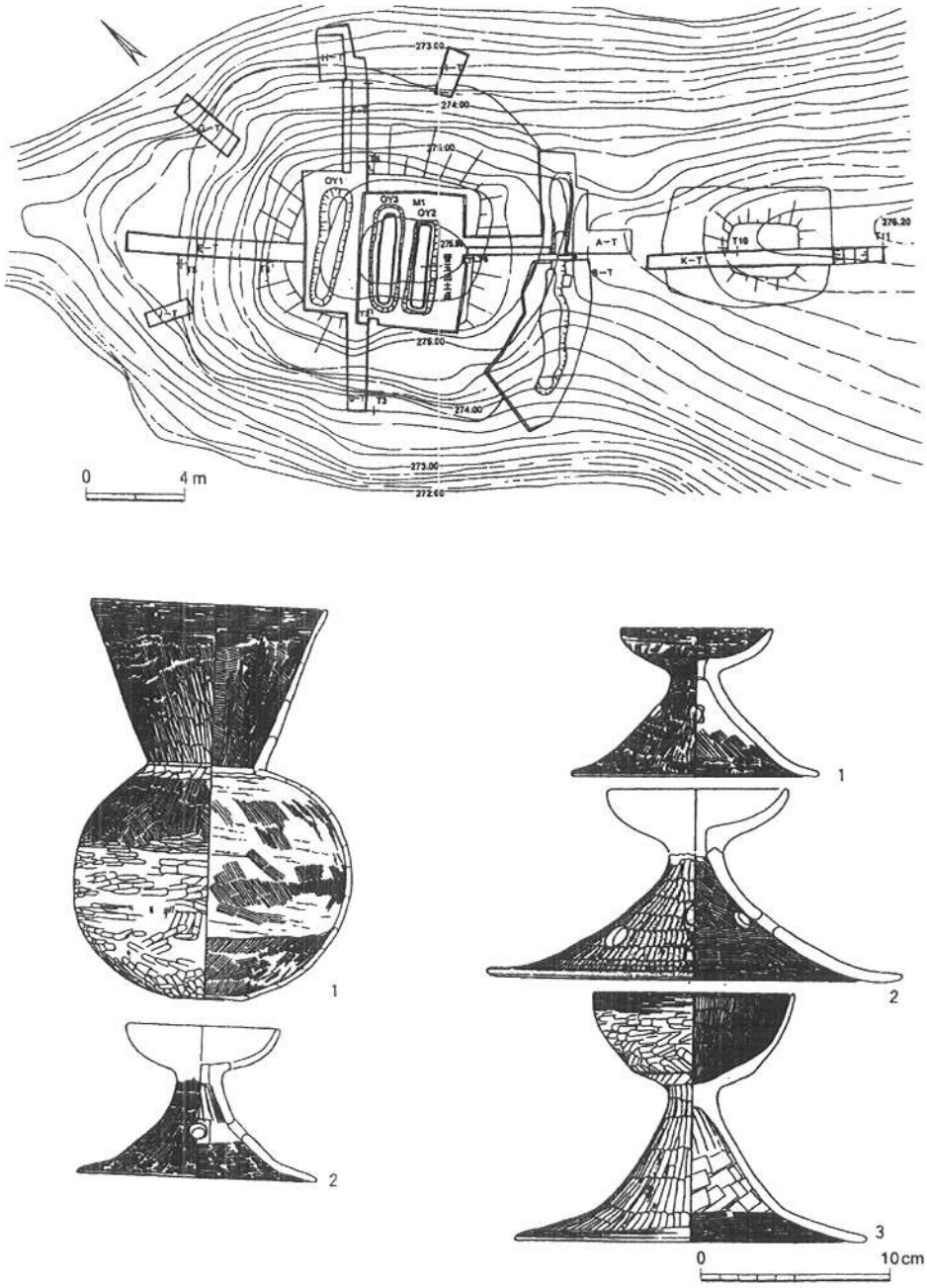

図3　横山古墳の墓壙及び出土の土師器
（米沢市教育委員会「横山古墳」遺跡詳細分布調査報告書代13集2000による）

などの破片が出土したが、塩釜式古期の土師器片で、四世紀前半代の遺物である可能性がある。なお至近距離より弥生後期の土器片が検出されており、両者に関連が深いことを思わせる。前年に調査された雁境古墳は方墳であるが、陣が峰古墳群より若干時期が下がるものの四世紀代の古墳である。

以上の事実から、四世紀後半の大型古墳が出現するのに先立って、小型の前方後方墳や方墳が存在し、これらの古墳がもっとも最初に出現した古墳であると思われる。おそらく蒲生田三・四号墳→稲荷森古墳、横山古墳→宝領塚古墳、陣が峰一号墳→天神森古墳への発展が考えられるのである。(5)

最上川上流流域である置賜地域の古墳の出現は、今のところ四世紀第二四半期まで遡ることが可能で、会津盆地を経由する北陸からの外来的要素が強く、これによって置賜地域の古墳時代が開始されたのであった。

三、最上川中・下流域の古墳の出現

最上川中流域の村山盆地（山形盆地）における古墳の出現の状況は、上流域とは少なからず異なるものがある。村山盆地を南から北へ流れる最上川流域には、後背湿地をひかえた扇状地扇端部に多くの古墳時代前期の集落を出現させた。それらの農業生産を背景として、盆地の中枢部を支配する首長墓が現れた。

一九九六年円筒埴輪片が発見されたことにより調査が実施された山辺町南部に所在する大塚天神古墳は直径五一メートル、高さ三メートル前後の二段築成による東北有数の円墳である。周囲には濠がめぐる。円筒埴輪や朝顔形埴輪片が墳麓や周濠内から多数発見された。これらの破片は古い埴輪にみられる野焼きによる黒班が認められ、口縁部がやや外反し、三条の突帯も高さ二センチ前後で大きく、その断面も方形や台形を呈する。外面はタテハケを原則とし、内面は斜行のハケやヨコハケ、口縁はヨコナデによって仕上げられている。復原された二個体の円筒埴輪は高さ六九センチ、径三五センチほどである。機内の埴輪に類似した特徴をもち、川西編年のⅡ期に相当するもので、四世紀末の年代が与えられている。畿内工人の手によるものとの見解もある。墳丘上部は天満神社があるため削平されていて平坦な面になっているが、内部主体の存否は不明である。埴輪を伴う日本海側北限の古墳とみられる。

この大塚天神古墳の南四キロの出羽丘陵の台地突端部には要害古墳がある。このあたりは山形盆地を一望におさめる景勝の地である。一部トレンチを設けて調査が行われた。一八×一九メートル、高さ三・七メートルの明瞭な方墳で、起伏の多い地面を削り出して平坦地をつくり整地して盛土を行っている。内部主体は不明であるが、木棺直葬の可能性が高い。トレンチより数十片の土師器小片が発見されたが、高坏脚部が大きく外方にひろがるものや口縁部が外反する壷の破片が検出されている。

おそらく四世紀でも第三四半期を下るものではない。先に述べた大塚天神古墳に先行する古墳であることは確かであろう。このことから最上川上流の置賜盆地とさほど時期差がなく、山形盆地にも古墳が出現したことになる。

出現期のみにとどまらず山形盆地の古墳は、上流部の置賜盆地の古墳と比較すると次のような差異がある。①山形盆地の古墳には、前方後方・前方後円の墳形がなく、円墳と方墳のみである。②山形盆地の古墳には、四世紀末から埴輪を伴うものがみられるが、米沢盆地で埴輪を伴うものは皆無である。③五世紀後半以降山形盆地の古墳の内部主体は箱式石棺が卓越するが、米沢盆地では箱式石棺もみられるものの木棺直葬によるものが多い。④終末期以降に米沢盆地では横穴式石室が導入されるが、山形盆地では全くみられない。

出現期も含めてこれらの大きな違いは、古墳出現に際しての系譜の差異と展開にあたっての社会状況の違いが反映されたものとみられる。後者については次項で述べることにして、出現期については古墳築造にあたっての流入経路の違いがあったものとみられる。すなわち上流域の米沢盆地は、北陸―会津ルートによるものであり、山形盆地は奥羽山脈を越えた仙台・名取平野方面からの進出によるものであった。弥生時代後期の遺跡は、最上川流域にきわめて少ない。人と物の頻繁な移動により、人口希薄なこの地に多くの人びとが移住するという外来的な要因によって、最上川流域の古墳時代が開始されたのであったと考える。

山形盆地の北の新庄盆地は、尾花沢盆地を境に古墳が全くみられないことや古墳時代の遺跡がきわめて少ないことから、さらに北の秋田県域と共通し、古墳時代においては続縄文文化以降のエミシの領域であり、別の世界が広がっていたものとみられる。

一方最上川下流域の日本海にのぞむ庄内平野については、特に最上川以南の田川地域の鶴岡市西部において、古墳時代集落跡の調査が相ついで行われ、その様相もかなり明らかになっている。とくに四世紀代の集落跡が鶴岡市畑田・中野、藤島町三和、さらに最上川北の酒田市関に及ぶことが発掘調査による出土遺物から確かめられている。[6] とくに畑田遺跡における周溝を伴う竪穴付住居跡や建物跡は北陸に起源をもつものである。古式の土師器は北陸的な様相が強く、畿内における庄内式の様式から布留式に及び、いわゆる「能登型甕」なども含め、北陸北東部の様相が濃厚である。磐越地方の古墳出現期についてふれられた中での越後土器編年によればⅡ―二期からⅣ期までのものがふくまれるという。

ところが古墳そのものには、いまのところ鶴岡市菱津から出土した五世紀後半に位置づけられる石棺がもっとも古い。もっとも四世紀代の土師器が発見された藤島町三和遺跡に近い丘陵

部突端にある添川古墳が最近注目されたが、まだ調査は行われていない。その東側にも完好な円墳があり、ともに円墳ながら五世紀以前の古墳である可能性がある。

現状では庄内平野の古墳は少ないが、北陸―越後ルートで人々がかなり移動したことを契機に、この地の古墳時代が開始されたものとみられる。これが最上川を遡上して内陸部に伝播することはなかったらしい。古墳の初源にあたって、置物・村山・庄内の各地域の古墳出現の状況はかなり異なるものであったものと思われる。

四、最上川流域における古墳展開の概要

最上川流域における古墳出現の事情が、それぞれの地域において異なるように、中期から後期にかけての古墳展開の状況も違うものが多かった。

まず上流域の置賜地域では、それぞれ北・南・西部の三地域において後期に至るまでほぼ順調な古墳の展開が認められる。南部の米沢を中心とする地域では、宝領塚と戸塚山の中間の窪田地内に径二六・五メートルの八幡塚と小円墳からなる窪田古墳群がある。また鬼面(おもの)川を越えた西部の広幡地区には六〇メートルの整正な前方後円墳である成島一号墳を中心に方墳五基と円墳一基からなる成島古墳群がある。成島一号墳は、稲荷森古墳につぐ県下では二番目の規模の前方後円墳であるが、発掘調査より後円部から長大な墓坑が発見され、長さ八・四メートルと推定される割竹形木棺が埋置されていたと推定された。墓坑内からは鹿角装の鉄剣、鉄鏃二点、鉇（やりがんな）、管玉七点、靫の破片などが検出されている[7]（図2―3）。

これより北二キロの地点、同じ丘陵の北端には全長四一メートルの前方後円墳を中心に七基以上の小円墳が分布する。成島一号墳は四世紀末か五世紀初頭の年代と考えられるが、これらの両古墳群は四世紀後半より五世紀前半にかけての古墳とみられる。

米沢市西部におけるこれら新たな古墳群の発見は、前項で述べた三つの政治勢力にもう一つの政治集団の出現の存在を示すものとして把えることも可能であるが、宝領塚または天神森と近縁の関係を有する集団と考えることもできる。成島・京塚古墳群の北には二〇基の小型前方後円墳を含む二〇二基からなる一大古墳群からなる下小松古墳群が展開する。おそらく墳形の類似などから最上川西域において天神森の系譜を引く下小松古墳群がさらに南へ勢力圏を拡大したものが成島・京塚古墳群と考えることができる。これらの二古墳は、四世紀末に成立して五世紀前半までの数十年にわたるものであり、いずれ下小松古墳群の集団の中に吸収併合されたものと思われるのである。

さて南部の集団は、窪田古墳群をへて五世紀後半より六世紀にかけて米沢市北部の戸塚山（標高三五六メートル）を本拠に

する。これらの戸塚山古墳群は山麓にかけて、七世紀以降の終末期まで及ぶ九支群一九三基の大小の古墳を成立させる。山頂部に位置する五四メートルの前方後円墳（図2―4）と二つの帆立貝式古墳は、五世紀後半より六世紀前半に及ぶものである。山頂に古墳が築かれた五世紀後半から六世紀前半にかけて、北の稲荷森の集団から南の米沢の集団に盟主権が移ったのであろう。山頂部の三基の古墳中、唯一発掘された全長二四メートルの帆立貝式古墳一三七号墳は、巨大な墓石で掩われた箱式石棺を内部主体とするもので、中年女性人骨が発見された[8]。

北部稲荷森古墳の後継者と目されるのは、高畠町時沢大師森山の岩窟中に納められる組合せ式長持形石棺に眠ったであろう首長である。これは後世に近くにあった古墳より発掘されたものを運び入れたもので、長さ二・一メートル、幅七八センチで、棺床に石枕が据えられ、側壁には朱彩が施されている。五世紀前半と推定される。その後の進展には不明な点が残るが、二四基の前方後円墳・方墳・円墳で構成される南陽市梨郷（りんごう）・竹原古墳群が後続するものとみられる。この時期には稲荷森古墳のころの勢威は北の集団にはなく、米沢盆地の盟主権は戸塚山山頂墳による南の集団がとって代わったのである。

最上川以西の川西地区では、天神森古墳以後背後の丘陵部にすでに述べたように、前方後円墳を含む六支群二〇二基の下小松古墳群が分布する。前方後円墳は全長三〇メートル規模のものであるが、これまで川西町教委と明治大学考古学研究室の合同調査により発掘された一五基の古墳は[9]、大方は五世紀より六世紀後半に至る木棺直葬によるもので、鉄製直刀・鉄剣・鉄鉇・小型鋸歯文鏡・鋤などが副葬されていたが、ほとんど副葬品が認められないものもある。

さらに眺山から北に延びて、国学院大学考古学資料館によって調査された長井市川井山古墳群がある[10]。発掘された川井山一号墳は基底部で直径一八メートル、高さ一、二メートルの円墳であった。内部は割竹形木棺直葬で刀子などが出土しているが、五世紀後半とみられる。西の集団は、川西を中心に北は長井盆地、南は米沢市西部まで席捲したことになる。

こうして古墳時代を通じて米沢盆地は、北・南・西の政治集団によりそれぞれ分割されて統治され、若干の消長はあっても相互の拮抗と牽制により外部の勢力を排除しながら、独自の政治体制による支配を貫徹することができた。いわば「首長共同体」による統治である。その影響力は律令体制下でも残存し、郡家が三つの地域間を移動していることからもうかがうことができる。

置賜地域が比較的安定したまとまりがある進展を示したのとは対照的に、最上川中流域の村山地域は、直接ヱミシの地に接することもあって、畿内の動向とも連動し、異なった政治地図をもって進展した。

山形盆地で最初に四世紀代に古墳が成立したのは、盆地西南部の須川西側の山辺町要害古墳と大塚天神古墳で、五世紀にかけてこの地域から菅沢古墳に至る現山形市街の西南域が古墳時代前期から中期にかけての本拠であった。

出羽丘陵東縁に位置する菅沢二号墳は、大塚天神古墳と同等の規模の五〇メートルの二段築成の円墳であり、円筒埴輪がめぐり墳頂部より家・楯・靫・短甲・甲冑型などの器財埴輪が発掘された[11]。墳頂に立つと山形盆地を一望におさめ、前面に蔵王連峯がそびえる。埴輪などから五世紀第三四半期とする年代が推定される。

またこれより一キロ北にある大之越古墳は、箱式石棺が上下にわたって二基発見され、上の棺からは単鳳式環頭大刀・長大な鹿角葬具付直刀・長大な鉄剣・刀子・袋状鉄斧・鉗（かなばし）・鉄鉇・冑の錣（しころ）などの鉄製品の他に土師器坩が副葬品として発見され、下の長さ二・七五メートルの大きな石棺の蓋石上からは絞具・円環・飾帯金具・剣菱形杏葉（ぎょうよう）などの馬具が出土した[12]。このように数多い鉄製品が発見された例は珍しく、騎乗の首長が存在したことを示している。単鳳式の環頭大刀は、国内産とするよりも新羅・百済など韓国南部で製作されたもので、畿内の王より北辺の首長に賜与されたものという。この古墳の築造時期は五世紀末から六世紀初頭とされている。（図4）[13]。前代の菅沢二号墳の大型円墳に対して、大之越は一四・五メートルの円墳である。

図4　環頭大刀之柄頭（単鳳環）
山形市大之越古墳出土

五世紀後半から六世紀前半にヤマト政権内部から武蔵国造の乱に至るまで大きな内乱があったといわれる。六世紀以降は一部の大王陵などは例外として、一般的に古墳は小規模化する。いずれにしても五〇〇年前後に地域的にも大きな変動があったことは確かであろう。

一系による支配政権であるかどうかは別にして西南部を本拠とする要害→大塚天神→菅沢二号→大之越とつづいた山形盆地一円支配の構造は、五世紀前半の大型古墳は未確認であるものの、五世紀後半より六世紀にかけて、盆地各水域に中・小円墳が一斉に出現する様相の中に大きな変動をよみとることができる。つまり西南部首長による盆地一円支配の崩壊と各水系ごと

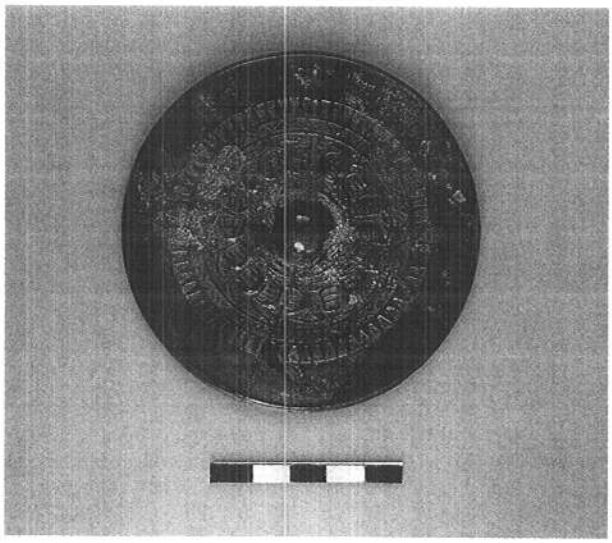

図5　変形捩文鏡（面径9.5cm）山形市お花山1号墳出土

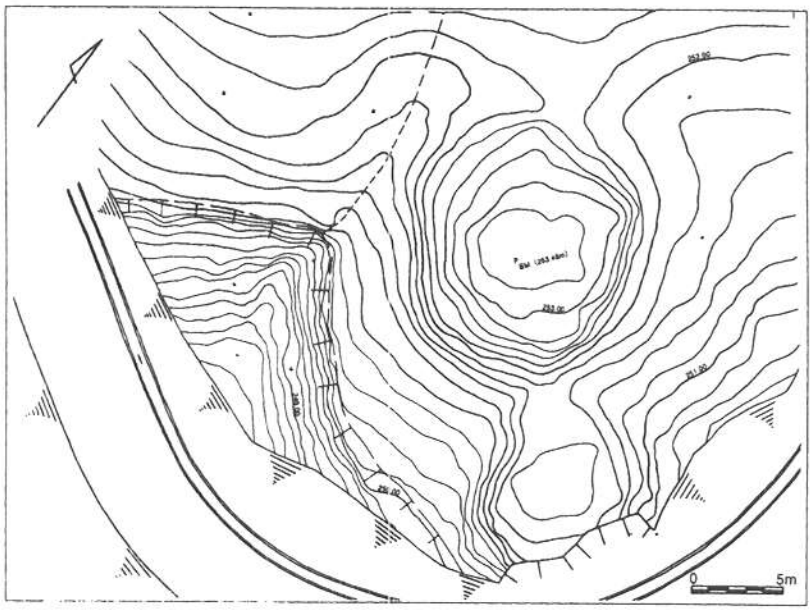

図6　山辺町坊主窪1号墳（北限の前方後円墳）

に中小首長が台頭し、これらとヤマト政権が個別的に同盟及至服属関係を強化したことが理解される。畿内を経由して北辺の首長にもたらされた銅鏡などの威信財や和泉陶邑（すえむら）産の須恵器が山形市お花山古墳から出土していること、日本海側北限の前方後円墳が六世紀になって山形盆地に出現することは、これらの事実を示しているにほかならない。[44]

具体的に山形盆地に一斉に後期の円墳が出現する状況をみよう。上山盆地宮川流域に前方後円墳一基を含む三基からなる土矢倉古墳群、馬見ヶ崎流域の山形市お花山古墳では二四基の古墳が発掘調査されているが、もとは四〇基余りの円墳が分布していたという。西南部の須川上流には谷拍・速見堂古墳群があり、その下流には北限の前方後円墳一基を含む山辺町坊主窪塩の山古墳群（図6）、立谷川流域に衛守塚古墳群、天童市火矢塚・遠矢塚古墳群、最上川屈曲部に寒河江市高瀬山古墳群、さらに最上川を北下して古墳時代古墳の内陸部最北限といわれる村山市河島山古墳群・名取古墳群が分布する。北限の円墳といわれる三六メートルの名取古墳を別とすれば、いずれも二〇メートル以下の円墳で、内部主体は大方は組合せ式箱式石棺である。副葬品はお花山古墳群の「変形帽捩（ねじ）文鏡」（一号墳）（図5）、乳文鏡（二二号墳）、鉄鋌・刀子・玉類・竪櫛（たてくし）などを除けば、せいぜい鉄鉇や刀子などでありいたって少ない。

下流域の庄内平野において、鶴岡市西部の水田地帯に矢馳・山田・清水新田・助作などの五世紀から六世紀にかけての良好な集落跡が発掘されているが、古墳として知られているものは余目町槇島における箱式石棺のみである。越後北部に古墳が少ない状況と相俟って、おそらく越後から庄内平野に進出した集団によって開発されたこの地域の共同体の政治様相のなかに、高塚古墳を造営するような要素は乏しかったのではないだろうか。ともあれ平野にのぞむ丘陵地帯において、添川古墳の例にみられるように今後発見の可能性があり課題としておこう。

五、おわりに

以上最上川流域における古墳の出現とその後の展開の様相について、その分布や形態から私見を述べた。

すでに再三ふれたように、最上川流域の出羽南部地域は、ヤマト王権の政治的支配及至影響力が及んだ北限の地で、北のエミシ社会に接するところであった。古墳が出現する当初から、上流域の米沢盆地は北陸―会津ルートによる人々の移動により、山形盆地は仙台平野からの影響により、庄内平野は越後方面からの進出によって、古墳時代が開始された。その展開においても、それぞれ異なった軌跡をたどることになる。とくにエミシと接する山形盆地においては、畿内からの文物が流入し、政治的変動にも顕著なものがあった。

律令制下、出羽国以前にもっとも早い時期に郡が設けられた

のは、これらの古墳が分布する地域であった。これはプレヤマト政権以来の密接な関連を示すものであった。

最上川流域に古墳が多く分布するのは、河川による地域間交流もあったが、当時の生産の拠点、つまり水田稲作の適地が河川流域の盆地にひろがり、かつその気候と地形の条件のほかに、北に伸びようとする北陸や関東・東海の人々のフロンティアによるものであった。もっとも古墳を築造した首長層より下位の人びとは方形周溝墓を死後の世界としたが、これは米沢盆地より最上川を下って山形盆地に伝播し、最上川を見下す高瀬山丘陵に営まれた可能性が大きい。最上川やその交流の各河川の果した役割は否定できず大なるものがある。その地域間の交流の実態は、集落跡から発見される土器の微視的な分析などを通じて明らかにされるであろうが、今後の課題としておきたい。

（二〇〇三・一二・一五）

［註］

(1)「稲荷森古墳」山形県立博物館　一九八〇、「稲荷森古墳」南陽市教育委員会　一九八九、「天神森古墳　川西町教育委員会　一九八四、「宝陵塚古墳」米沢市教育委員会　一九九〇などを参照した。

(2)「東北の古墳」沢田秀実（土生田純之編『古墳学入門』学生社　二〇〇三）

(3)甘粕健「東日本における古墳の出現」（『東日本の古墳の出現』甘粕健・春日真実編　山川出版社　一九九四）

(4)広瀬和雄「前方後円墳とは何か」（『日本考古学の通説を疑う』洋泉社新書　二〇〇三）

(5)川崎利夫「出羽南部における出現期の古墳」（『新世紀の考古学』大塚初電重先生喜寿記念論文集　二〇〇三）

(6)阿部明彦「庄内平野の古墳時代史」（『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生還暦記念論集　一九九二）

同「山形県における古墳文化研究の素描」山形県立博物館研究報告　第二〇号　一九九八。

(7)米沢市教育委員会「遺跡詳細分布調査報告書第一六集　別冊成島一号墳」二〇〇三。

(8)米沢市教育委員会「戸塚山一三七号墳発掘調査報告書」一九七八。

(9)大塚初重・小林三郎編「下小松古墳群（1）」川西町　一九九五及び同（2）一九九九。

(10)国学院大学考古学資料館「川井山遺跡群学術調査報告書」一九九〇。

(11)山形市教育委員会「菅沢二号墳発掘調査報告書」一九八九。

(12)山形県教育委員会「大之越古墳発掘調査報告書」一九七九。

(13)穴澤味光・馬目順一「出羽出土の韓半島系環頭大刀」清渓史学一六・一七合輯　二〇〇二。

(14)川崎利夫「古墳時代における出羽と大和」（石野博伸先生古稀記念論文集「古代近畿と物流の考古学」学生社　二〇〇三）

［参考引用文献］

柏倉亮吉「山形県の古墳」山形県文化財調査報告書　一九五三。
加藤　稔「最上川流域における古墳文化の展開」（「最上川流域の歴史と文化」所収）一九七三。
加藤　稔「最上川流域の古墳時代史」山形県立博物館研究報告11　一九九〇。

大塚初重「東国の古墳と大和政権」（吉川弘文館　二〇〇二）
川崎利夫「最上川流域における古墳文化の生成と展開」（地方史研究協議会編「流域の地方史―社会文化」雄山閣　一九八五）
加藤　稔・佐藤鎮雄「最上川流域の前方後円墳（方）墳」（山形県総合学術調査会「最上川」一九八二）
川崎利夫「出羽地域における古墳の成立」考古学研究94　一九七七。
川崎利夫「山形・秋田の古墳」（「古墳時代の研究11」雄山閣　一九九〇）